

平成 26 年度大学院派遣研修報告書

派遣者番号	25 S 01	氏 名	西尾 英里子
研究主題 —副主題—	共創型対話を取り入れた対話型授業に関する一考察 —小学校第 3 学年社会科の授業を中心に—		
所属校	大田区立西六郷小学校	派遣先	上越教育大学大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	<p>平成 25 年 6 月に第 2 期教育振興基本計画が閣議決定された。その前文には、我が国は変化が激しく先行きが不透明な社会に移行していることが示されている。このような情勢を受け、危機や課題に対応できる人材に必要な資質や能力について各方面で様々な方策が公表されている。このことにより、具体的な育成方法について今後も実践・検証が必要であると考えられる。</p> <p>21 世紀に必要な資質や能力について分析し、具体的な手だてを打ち出している一人として「多田孝志」が挙げられる。多田の主張は、今後求められる資質や能力についての育成の方向性と、「対話」という具体的な育成方法について言及している。よって、共創型対話を授業に取り入れる際の要件を整理し、授業実践から検証を行うことで、今後求められる資質や能力の育成方法の一材料を提示することができる。</p> <p>以上のことより、本研究は、共創型対話を取り入れた授業実践をもとに、共創型対話の促進要因と阻害要因を抽出することを目的とする。</p>
II 研究の方法	<p>広義の「対話」という意味で授業実践を管見すると、その表記には「話し合い活動」「協同学習」「学び合い」「討論」などが挙がる。そこで、教員の対話型授業に関する具体的な認識と、授業への対話型授業導入の現状を把握するべく初めに教員への対話に関する意識調査を行う。アンケート調査から対話型授業を計画する際に教師が感じている課題を中心に、多田の関係書籍を整理し、共創型対話を取り入れる際の要件についての抽出を行う。抽出要件については、多田へのインタビューを行うことで深化・明確化・確認し精度を高める。抽出された要件を取り入れ、第 3 学年社会科における共創型対話を取り入れた授業実践を行う。対象クラスについては日常的に対話を授業に取り入れるように意識している公立の小学校を選択し、日常的な対話指導との関連も考察材料の一つとする。(共創型対話と汎用的能力との関係からも考察ができるよう、対話に関する汎用的能力育成の調査を実践前に行う。)授業実践を基に対話の促進要因や阻害要因についての考察をまとめる。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>1 教員への意識調査より</p> <p>授業者は暗黙知の段階ではあるが対話を取り入れることで教科のねらい以上の効果を感じていることが分かった。また、教員が感じている対話型授業の良さに関する項目について、多田が主張する「対話の目的」と内容が合致することも確認できた。一方、授業に取り入れる具体的な方策については不安感をもっていることも分かり、対話を取り入れた単元を計画・活用する段階に戸惑っている。特に授業前の子供たちの対話に関する汎用能力の必要性を感じていることが分かった。このことにより、子供たちがもっている対話技術に関することや、具体的な授業案の提示などが研究の視点として重要になってくると考えられる。</p> <p>2 共創型対話の要件抽出</p> <p>共創型対話は、対話内の思考の往還による相互影響が、個々の思考や感情の再組織化に深く関わり、一連の活動自体が連続していくことを表しており、対話を通した人間関係構築の連続性が重要な視点となっている。</p> <p>共創型対話を形作る要件としては「児童への継続的な素養育成」「児童に対して対話に関する理解教育を行う必要性」「単元内における共創型対話体験」の三点に収斂することができた。</p> <p>3 実践授業</p> <p>抽出された要件を基に小学校社会科第3学年「くらしと商店」の授業を計画・実践した。授業記録を基に日常的な対話指導と共創型対話成立との関連や、本時の学習計画が及ぼす影響、教員の関わりの影響の視点から考察を行った。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>対話の促進要因として、対話型授業には、「書く活動」「聴く活動」「対話経験」の日常的な活動の継続が有用であることが読み取れ、断片的ではあるが、汎用的能力育成活動と対話成立との因果関係についての可能性を抽出することができた。</p> <p>また、対話型授業の単元を構成する際に既得知識を生かしたテーマを設定する重要性と、教員のファシリテーターとしての影響について示し、振り返りなどの対話を想起させる場を設定することで対話への意識の変革をもたらすことが分かった。</p> <p>一方、対話の阻害要因についても幾つか抽出することができた。これらの検証を受け、共創型対話を取り入れた授業を構築する際の視点の一つとして、①準備段階、②実践段階、③実践後段階の三つにおける留意点において具体的な例を論文にて提示した。</p>